

ほんばこ



No. **57**



日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 57 号（通巻第 73 号）

2018 年 12 月 7 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- | | | |
|------------------------------------|-------|-------|
| ・「岩手から」 | 高橋 道明 | 2～3 p |
| ・《図 書 紹 介》 | 教育図書館 | 4～5 p |
| ・最近の受入図書（2018 年 7 月～2018 年 11 月受入） | | 6～7 p |
| ・教育図書館のご案内 | | 8 p |

岩手から

高 橋 道 明

「震災から三年」「四年六か月」「月命日」……。数年前までよく使われていたこの言葉もいつしかあまり目や耳にすることも少なくなってきたような気がしています。使われなくなることがうれしいことなのか、震災の風化と抗うべきなのか、それもまだ分かりません。ここ数年、日本中至る所で自然の猛威による大災害が発生し、いろんな所が「被災地」と呼ばれるようにもなりました。

もうすぐ2019年を迎えます。八回目の「3.11」がめぐってきます。

あの日、迫りくる津波に追われながら生徒や職場の同僚と必死で逃げた私の妻は、テレビであの震災に関する番組が流れるとチャンネルをそっと替えます。いやでも聞こえてくるあの震災関連の番組や新聞報道に、耳をふさぎ、目を閉じれば自分を守ることができます。

でも、季節が変わり、やっぱりあの時期になると、空や雲の色、山々の風景、海の色、降る雪のしめっぽさや日差しの色、土や風の匂いがあの日の光景や、避難所での生活を思い出させます。

「復興」とは何だろう？何がどうなれば「復興した」と言えるのだろうか？これは、沿岸被災地の学校に勤務し、自らも被災地に住んでいる仲間からの問いかけです。街にまたお店がたくさんできてにぎやかになること……。道路が通ること……。学校が再建されること……。自宅が再建されること……。被災し失ったものは、人それぞれで違います。ですから「復興」もそれぞれの状況によって違うのかもしれない。一人ひとりの心の「復興」はなおさらです。

「一次避難場所から二次避難場所へと生徒や小学生、そして地域住民と一緒に逃げていたときは、『この子たちをなんとか安全に避難させてあげなければ』と考えていた自分がいました。でも、これまで聞いたことのない地鳴りと潮のにおいがして、津波が迫ってきたとき、自分が逃げることに精いっぱい必死になっていた。こわかった。こわくてこわくて後ろをふり返ることができなかった。その時、生徒たちのことを考えていたかさえ覚えていない……。ただ、自分が死にたくないと思死だった。」

震災以来、様々な場で、自分の被災経験と生徒たちとの学校生活の様子を何度も報告してくれていた仲間が、そう話すと声を詰まらせました。震災体験だけでなく、あの時の自分の心情さえ何度も何度も話す機会があったのに、自分の気持ちはずっと心の奥底にしまい込み、話すまいとそう決めていたのだろろうと思いました。

津波で家族を亡くした生徒がいました。それでも、勉強に部活動に生徒会活動にと明るく元気に取り組む子でした。その子が思いつめた表情を見せるようになり、何度か話を聞くなかで、新しい家族ができたことを打ち明けられました。家族を失った悲しみから必死で立ち上がろうとしてきた生徒。家族を失い、つれあいという心の支えがほしかったのは大人も同じだったのでしょう。

「『がんばらなくていいんだよ。泣きたくなったら泣いていいんだよ。』と話すと、『がんばらなくていいって言われたら、わたし、ほんとに何もしなくなると思う。』という答えが返ってきたんです。髪を染めたり暴れたり、もっとやんちゃしてくれていいのに。」とその生徒をみて仲間は思ったそうです。

「あのときは、本当に野球を続けていいのかと真剣に悩みました。」

2011年3月、卒業間近の小学六年生だった教え子が、選抜高校野球大会の出場を決め、インタビューに答えていました。当時のつらく苦しく悲しい思い出を覚えていて言葉にできることは、幸いなことかもしれません。

あの時、小学校に入学する前の子どもたちが今、小学校高学年や中学生となっています。落ち着いた生活がなかなかできていないということを聞きます。

あの混乱した地域の状況や家族の様子をうまく自分の言葉で整理するすべさえ持っていなかったことが原因だとすれば、私たち教職員は、子どもたち一人ひとりの心の奥底にあるその行動の根っこにあるものを探り当て、そこにやさしく手を差し伸べなければいけません。それが私たち学校で働く教職員集団としての専門性だと思います。

あの瓦礫の中から学校は一步一步日常の生活へと歩みを進めました。運動会、学習発表会、授業参観……。避難所となった学校で一緒に暮らす地域の方々は、子どもたちが精いっぱい、走り、笑い、転び、泣く、そんな子どもたちの姿をみて、感動し涙していました。当たり前で学校で繰り返される子どもたちの日常がどれだけ保護者や家族、地域を勇気づけることなのかを目の当たりにしてきました。

「子どもは地域の宝」「学校は地域の夢を育むところ。未来そのもの。」

あの震災を経験し、被災地で働く私たちは、この言葉を身に染みて経験することができました。

だからこそ、日常生活の中で、子どもたち一人ひとりと向き合う時間を奪うもの、向き合う教職員の心を奪うもの、子どもたちにやさしく接して

あげることができるための心身ともに休養できる時間を奪うもの、これらを注意深く拒まなければなりません。

それが被災地で働く教職員の使命であると思っています。

一般財団法人 岩手教育会館 専務理事
岩手県教職員組合 中央執行委員

新岩手教育会館

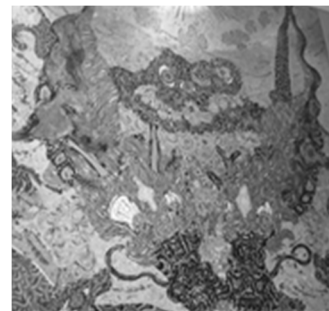
2018年4月竣工。鉄筋コンクリート造

地下1階・地上4階

岩手教育会館は、県都盛岡にあり、風光明媚な立地を誇っています。目の前に緑豊かな盛岡城跡公園。石垣に400有余年の名残をとどめています。



エントランスには現代アーティスト小松美羽さんの壮大なアートが飾られています。「闇を照らす光を描こう。」という気持ちが伝わってきます。著作本『世界のなかで自分の役割を見つけること』もお読みください。（p 7 受入れ図書）



神獣讃歌「巖鷲幸呼来豊穰さんさ」

《図 書 紹 介》

9月の終わりに岩手県宮古市を訪問し、「感じる」ことからの「学ぶ」大切さを強く感じました。

岩手県宮古市では、東日本大震災により甚大な被害が出た**田老地区**の当時の状況を伝える「**学ぶ防災ガイド**」を行っており、案内していただきました。

最初に**防潮堤**（写真）についてガイドをしてもらいました。防潮堤を超えて田老町を襲った津波。防潮堤にのぼってみることでその凄さを実感します。日本にある“万里の長城”とまで言われていた防潮堤。



高さ10m、長さ2400m（第一防潮堤1350m、第二防潮堤、582m第三防潮堤501m）大丈夫と思ってしまう気持ちも理解できます。しかしながら、さらに大きな防潮堤を建設しているのには、違和感を抱きました。何より怖いのは、海が見えないことです。

自然の様子を感じ取る海の様子が見えないまま、巨大な壁で町を守る。自然災害について防災について深く考えさせられました。

次に被災した状態で保存されている「**津波遺構たろう観光ホテル**」（写真）を見学。津波発生時の映像（被災者であるホテル社長が撮影）を見ました。同じ目線を体験できます。自然災害の恐ろしさ、避難の大切さを学びました。自分自身で感じるために、ぜひ訪ねてみて下さい。



また、宮古市のホームページから、**東日本大震災関連資料**を見ることが出来ます。「**東日本大震災宮古市の記録（震災記録誌）**」のページでは、「すまいと暮らしの再建」「産業・経済復興」「安全な地域づくり」の3つを復興の柱に据え、3本柱の中の「安全な地域づくり」で「**災害記憶の後世への継承**」のため、震災記録を保存・作成、記録誌としてまとめています。



『**社会科教育と災害・防災学習 — 東日本大震災に社会科はどう向き合うか**』 日本社会科教育学会編 明石書店 2018. 8. 20

本書は、防災教育について、災害の現れ方は地域によって大きく異なるため、防災を「地域」を扱う社会科教育の中で取り上げて学習を深めていくことが重要としています。防災教育の目的、防災教育で身につける力、フィールドワークの重要性など、今後、他地域で発生する災害に備えるための授業のヒントを伝えてくれます。



『**教育現場の防災読本**』 「防災読本」出版委員会 著 中井仁監修 京都大学学術出版会 2018. 6



東日本大震災の反省から、子どもを守るために必要な防災知識を教師や専門家が体系的にまとめています。

自然災害概説から始まり、災害と法律、災害と行政、地域防災、防災と教育など10章に整理され、様々な角度から災害について考えることができます。防災教育についても、体系的に考える一助となる一冊です。

『三陸海岸大津波』吉村昭著 文藝春秋 2004.3

明治29年、昭和8年、昭和35年、繰り返し三陸を襲った大津波の証言・記録を丹念に取捨選択して、津波の被害状態や様相に迫る記録文学です。著者の吉村昭氏は2006年に亡くなっていますが、実際の凄まじさを想起させる筆力は、圧倒されるものがあります。【原著は中公新書昭和45年刊】



『津波てんでんこ』山下文男著
新日本出版社 2008.1

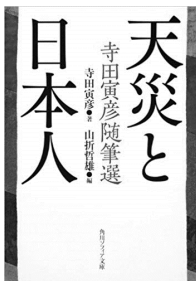
著者の山下文男氏は岩手県三陸海岸で生まれ。明治の三陸津波で一族9人が亡くなっており、自らも昭和8年の津波を体験。「例えば津波では、親が子を助け、子が親を助けようとして共に死亡するという悲惨な共倒れ現象が毎回のように繰り返されている。その体験から、津波のときは、親でも子ども人のことなどは構わず、銘々ばらばらに一時も早く逃げなさい」という意味での、本書のタイトル「津波てんでんこ」という言葉になった（第1章52頁、「あとがき」）。一人でも多くの人が津波の急襲から身を守るための哀しい知恵なのである。」



『天災と日本人 ― 寺田寅彦随筆選』寺田寅彦著 山折哲雄編集 角川学芸出版 2011.7

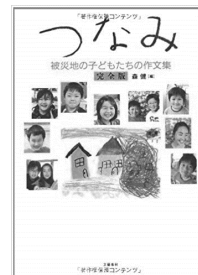
編集者の山折哲雄氏は、本書のはじめに問いかけます。

「いま、なぜ、寺田寅彦なのか。」「地震列島に生きる日本人が災害をどのように受けとめ、どのように生きていったらいいのか。根本的に考えなければならないから。」地震学者寺田寅彦の随筆を読むことの必要性を説いています。先人の智慧に学びたい一冊です。



『つなみ ― 被災地の子どもの作文集 完全版』森健著
文藝春秋 2012.6

子どもの目で見、耳で聞き、肌で体感した地震や津波、自然の猛威を子ども自身の表現で綴った作文集として貴重な1冊。「私は屋上に走ってひなんしました。その時はもう、つなみが来ていて、車やがれきが流れてくるし、人はおぼれているしで、本当にこわくて悲しい気持ちでいっぱいでした。……」



パソコンからの検索サイトでは、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）があります。震災の記録等のポータルサイトです。「ひなぎく」で検索してみてください。



国立国会図書館と総務省は、東日本大震災に関するデジタルデータを一元的に検索・活用できるポータルサイト「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ」（愛称：ひなぎく）を分担して開発・構築し、平成25年3月7日（木）に公開しました。

（教育図書館 川内）

教育図書館について

教育図書館は1966年10月1日、(財)日本教育会館の附設図書館として設立されました。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほか、国民教育文化総合研究所（略称教育総研、前身は国民教育研究所）の研究成果、教育学一般、教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供しています。

最近の受入図書

(2018年7月～2018年11月受入)

【日教組刊行物】

- 『日教組教育研究全国集会要綱 第65－67次』日本教職員組合編 製本版
- 『憲法・平和・教育を守る母と女性教職員の会全国集会 討議資料 2018』日本教職員組合編
- 『米国教育使節団報告書、米国教育使節団に協力すべき日本側教育委員会の報告』日本教職員組合編 伊ヶ崎暁生・吉原公一郎編・解説 日教組国会対策委員会・教育改革国民運動推進委員会 1984.3

【教育総研・県教組刊行物】

- 『季刊フォーラム教育と文化』91号（2018 Spring）教育文化総合研究所編 榎アドバンテージサーバー 2018.7
- 『季刊フォーラム教育と文化』92号（2018 Summer）教育文化総合研究所編 榎アドバンテージサーバー 2018.10
- 『主権者はつくられる』池田賢市・桜井智恵子・教育文化総合研究所「研究会議」編著 榎アドバンテージサーバー 2018.7
- 『熊教組60年のあゆみ』熊本県教職員組合編
- 『岡山県教職員組合結成70周年記念 ― 運動の継承と創造』岡山県教職員組合編
- 『長野県教組年表』長野県教職員組合編
- 『神奈川県教職員組合70周年記念誌』神奈川県教職員組合編

* ご寄贈いただき、ありがとうございます。

【文部科学省刊行物】

- 『文部科学白書』平成29年度 文部科学省編 日経印刷 2018.8.
- 『諸外国の教育動向』2017年度版 第154集 文部科学省編 明石書店 2018.8

【防災・減災】

- 『社会科教育と災害・防災学習』日本社会科教育学会編 明石書店 2018.8
- 『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来』宮城県教職員組合編 明石書店 2013.5
- 『津波避難学』清水宣明著 すぴか書房 2016.3
- 『危機対応学』東大社研，玄田有史，有田伸編 勁草書房 2018.9
- 『コミュニティ防災の基本と実践』公立大学連携地区防災教室ワークブック編集委員会，大阪市立大学都市防災教育研究センター編 大阪公立大学共同出版会 2018.3
- 『教育現場の防災読本』「防災読本」出版委員会 著 京都大学学術出版会 2018.6

【社会・教育】

- 『海後宗臣教育改革論集』海後宗臣著 寺崎昌男、斉藤利彦、越川求編 東京書籍 2018.2
- 『歴史学者と読む高校世界史』長谷川修一，小澤実編著 勁草書房 2018.6
- 『教育と社会階層』中村高康・平沢和司・荒牧草平・中澤渉編 東京大学出版会 2018.7
- 『A Iに負けない「教育」』渡部信一著 大修館書店 2018.8
- 『教職のための学校と教育の思想と歴史』宇内一文編 高木加奈絵、長嶺宏作ほか著 三恵社 2018.4
- 『いじめからいのちを守る』近藤卓著 金子書房 2018.2
- 『算数少女ミカ 割合なんて、こわくない！』石原清貴著 日本評論社 2018.8
- 『水道の民営化・広域化を考える』尾林芳匡、渡辺卓也編著 自治体研究社 2018.7
- 『子供の死を祈る親たち』押川剛著 新潮社 2017.3
- 『未来の年表 2』河合雅司著 講談社 2018.5
- 『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち 増補新版』相良敦子著 河出書房新社 2016.9

『北欧式 眠くならない数学の本』クリスティン・ダール著・文 三省堂 2018.6

『ブラック校則』荻上チキ編集, 内田良編集 東洋館出版社 2018.7

『0歳からはじまるオランダの性教育』リヒテルズ直子著 日本評論社 2018.6

『パパは脳研究者』池谷裕二著 クレヨンハウス 2017.8

『おカネの教室』高井浩章著 インプレス 2018.7

『「農業を株式会社化する」という無理』内田樹, 藤山浩, 宇根豊, 平川克美著 家の光協会 2018.7

『子どもの貧困と食格差』阿部彩・村山伸子・可知悠子・鴈咲子編著 大月書店 2018.4

『文系大学教育は仕事の役に立つのか』本田由紀編 ナカニシヤ出版 2018.8

『おとなの発達障害かもしれない!』森島明子著 イースト・プレス 2017.9

『権力と新聞の大問題』望月衣塑子著 集英社 2018.6

『「他人の目」が気になる人へ』水島広子著 光文社 2018.5

『いじめを生む教室』荻上チキ著 PHP研究所 2018.7

『定年前後の「やってはいけない」』郡山史郎著 青春出版社 2018.4

『保守と大東亜戦争』中島岳志著 集英社 2018.7

『＜繋がる力＞の手渡し方』野本三吉著 現代書館 2017.1

『管見妄語——できすぎた話』藤原正彦著 新潮社 2018.8

『ものがたり 現代労働運動史 1』1989～1993 高木郁朗著・文・その他 教育文化協会著 明石書店 2018.6

『思いのない学校、思いだけの学校、思いを実現する学校』妹尾昌俊著 学事出版 2018.8

『日本列島大変動——巨大地震、噴火がなぜ相次ぐのか』後藤忠徳著 ポプラ社 2018.4

『深い学び』田村学著 東洋館出版社 2018.6

『日本が売られる』堤未果著 幻冬舎 2018.10

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『歌集 滑走路』萩原慎一郎著 KADOKAWA 2017.12

『きのうの影踏み』辻村深月著 KADOKAWA 2018.8

『ガラパゴス』上・下 相場英雄著 小学館 2018.7

『世界のなかで自分の役割を見つけること』小松美羽著 ダイヤモンド社 2018.3

『宝島』真藤順丈著 講談社 2018.7

『送り火』高橋弘希著 文藝春秋 2018.7

『統合失調症がやってきた』松本ハウス著 幻冬舎 2018.6

『山崎豊子読本』新潮文庫編集部編 新潮社 2018.9

『武士道ジェネレーション』菅田哲也著 文藝春秋 2018.9

『漂砂の塔』大沢在昌著 集英社 2018.9

『思い出が消えないうちに』川口俊和 サンマーク出版 2018.9

編集後記

「天災は忘れたところにやってくる」と言い出したのは、寺田寅彦氏【明治11年（1878）誕生 昭和10年（1935）没 享年58歳】といわれています。

「何度同じ災害に会っても決して利口にならぬものであることは歴史が証明する。東京市民と江戸町人と比べると、少なくとも火事に対してはむしろ今のほうがだいぶ退歩している。そうして昔と同等以上の愚を繰り返しているのである」

（時事雑感：昭和6年1月「中央公論」）

まさに、歴史に学び、しっかりと防災対策の必要があると思うこの頃です。（川内）

教育図書館案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 休館日：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
館外貸出には、利用者登録が必要です。
(ご自宅住所が確認できる身分証明書をお持ち下さい。受付で貸出カードを発行します。)
- * 返却方法
開館中 カウンター受付へ
閉館時 「ブック・ポスト」をご利用下さい。
設置場所：5F 図書館入口前
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピーサービス
(白黒1枚10円／カラー30円)

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など このほか旧国民教育研究所時代のあらゆる刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導

要領、指導書など

- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 2018年9月現在約68,000冊になります。
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。
(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wopc/pc/pages/TopPage.jsp>)
- 千代田区立図書館のホームページ「大学・専門図書館横断検索」からも教育図書館の蔵書が検索できます。

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
九段下駅 6番出口より徒歩7分
竹橋駅 1b出口より徒歩5分
水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

